

國學院大學學術情報リポジトリ

The relationship between the various uses of the Japanese particle “made”

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2023-02-05 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: Yabuzaki, Atsuko メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.57529/00000155

マデの諸用法の相関関係

藪崎 淳子

1. はじめに

現代日本語の助詞マデは、従来3種に大別されることが多い。

【表1】マデの従来分類

用例	従来分類名称	
(1)太郎まで来た。	取り立て用法／取り立て助詞	→取り立て用法
(2)異常なまでに執着した。	程度用法／形式副詞	→程度用法
(3)歩けるまでに回復した。		
(4)10番まで宿題にした。	格助詞／格助詞に準ずるもの	→非評価用法
(5)5時まで遊ぶ。		
(6)学校まで歩く。		
(7)係の者までお尋ね下さい。		
(8)5時までに提出する。		

立場によって、(1)は「取り立て用法」や「取り立て助詞」などとも、(2)(3)は「程度用法」や「形式副詞」などとも呼ばれる。また(4)～(8)は「格助詞」やそれに準ずるものとされることがある。本稿では品詞分類の問題に立ち入らずに議論すべく、表1の右に示した「取り立て用法」「程度用法」「非評価用法」という呼称を用いる。

「非評価用法」は、マデの示す項目に対して特定の評価を表さない用法を指す^{注1}。当該用法は、他の2つの用法とは異なる品詞であると見なされることが多く、これと他の用法との関係を説くことを主眼とした先行論は少ない。また、表1に示した以外にもマデには次のような固定した形でしか用いられない用法があるが、これらと表1にあげた用法との関係もあまり論じられていない^{注2}。

- (9) 病院へ行かないまでも風邪薬はのむ。
 (10) 風邪ぐらい病院へ行くまでもない。
 (11) 実体験を書いたまでだ。
 (12) 私が知っているのはそこまでだ。

本稿はこうした例も含め、マデの諸用法の相関関係を考慮した新たな分類を提示する。以下、2節では各用法の定義を示し、3節で従来³の分類の問題を指摘する。そして、4節で本稿の分類を提示し、5節でマデの諸用法を貫く意味について述べる。

2. 「取り立て用法」「程度用法」「非評価用法」とは

本節では、3種の用法の定義を確認する。

まずは「取り立て用法」である。「(1)太郎まで来た」は文中で「太郎」を示すのみでありながら、「次郎、三郎」など、「来た」という意味で同類の項目も想起させる「範列関係」を表している。また、“最も来る可能性が低いという見込み⁴に反して太郎が来た”という“意外”と、“次郎達に加えて太郎も来た”という“累加”も表す(以下、(1)の表す意味を“意外・累加”と呼ぶ)。「取り立て用法」の捉え方には、範列関係を表すものとする立場(仁田1997、益岡・田窪1992など)と、範列関係に加えて何らかの強調的な意味を表すものとする立場(寺村1991、日本語記述文法研究会2009など)がある。後者の立場では、(1)が「取り立て用法」に属するのは、範列関係を表すことに加えて“意外”を表すが故となる。しかし、4節に詳述するが、前者のように捉えた方が、(1)が否定文に生起する場合を「取り立て用法」から取り溢さずに済むなど、有意である。従って、本稿は「取り立て用法」を広く捉え、範列関係を表すものとする立場をとる^{注3}。

次は「程度用法」である。「(2)異常なまでに執着した」は「執着した」状態が「異常だ」と評価される程度であること、「(3)歩けるまでに回復した」は「回復した」状態が「歩ける」程度に及んだことを表している。このように、「程度用法」とは、文中の語(主として述語)の表す動作・状態の程度量を、前接する語との組み合わせによって表すものである。

最後は「非評価用法」である。「(4)10番まで宿題にした」は問題の番号、「(5)5時まで遊ぶ」「(8)5時までに提出する」は時間、「(6)学校まで歩く」「(7)係の者までお尋ねください」は空間という範囲をそれぞれ表している。範囲を表すという点では、「(1)太郎まで来た」も「来た」のが「…三郎、次郎」から「太郎」に至る項目であることを表す点で同じである。しかし、(1)の範囲には意外性・難易度という評価が関わるのに対し、(4)~(8)のそれには評価は何ら関与しない。また、(4)~(8)はカラなどと共起し、範囲の始発点を示し得る点でも(1)とは差がある。「非評価用法」とは特定の評価を表すことに関知せず、カラと対応可能な範囲を

表すものである。

3. 従来分類の問題

表1に示した従来分類において、主に問題となるのは「非評価用法」である。2節で述べたように、当該用法のマデは評価に関知しない、カラと対応可能な範囲を表す点では共通しているものの、述語との結びつきによって表す意味は均一ではない。その意味の差が見えないところが、従来分類の問題点である。

丹羽(1992)は、「(4)10番まで宿題にした」を「(1)太郎まで来た」と同じく「取り立て用法」とする。それは、(4)が文中で「10番」を示すのみでありながら、「宿題にした問題」という意味で同類の「…8番、9番」という項目を想起させる範列関係を表す点で(1)と同じだと考えるからである^{注4}。また、井島(2007: 48)が「他の要素(中略)に加えて当該要素(中略)を提示するという点からも、一歩〈添加〉の用法に踏み込んでいるとも了解できる」と述べるように、(4)は「…8番も9番も10番も宿題にした」と、「累加」を表す点でも「取り立て用法」の(1)と同じである。ただし、井島(2007)は(4)のようなマデは「〈範囲〉を表わしているという点で、まだ格助詞的用法にとどまる」とし、(1)ではなく、(5)～(8)と同類とする。ここで重要なのは、(4)を「取り立て用法」と「非評価用法」のいずれか一方に定めることではなく、両用法に属し得る意味を表しているということ、即ち範列関係も、評価に関知しない範囲も表しているという事実である。この点を踏まえ、「非評価用法」を見ると、範列関係を表すものの他、動作の量、あるいは限度を表すものがある。

「(5)5時まで遊ぶ」は「遊ぶ」という動作が継続した後、マデの示す「5時」に到達して動作が終了することを表す。「(6)学校まで歩く」も「歩く」という動作が継続した後、マデの示す「学校」に到達して動作が終了することを表す。(5)の「遊ぶ」、(6)の「歩く」は、いずれも非内的限界動詞であるが、マデの示す点に至ると動作が終了する。非内的限界動詞の表す動作を限界づけられるのは、「30分遊ぶ」「1km歩く」など量を表す語句であり(工藤1995、金水2000)、マデもこれらと同様の働きをしていると考えられる。なお、マデが量を表す語句と同じ働きをすることは、内的限界動詞との結びつきからも言える。たとえば、「乗る」は「乗り込む」という変化によって必然的に動作が終了することを表す動詞である。しかし、「10分／駅までバスに乗る」とすると、「乗っている」という結果状態が一定量継続した後を終了することを表す。それは、「10分」もマデも、動作・状態の継続量を定める働きをするからであろう。「10分」は直接的に動作・状態継続の総量を表すのに対し、(5)(6)のマデは到達点を示すことがそこに至る間の継続量を表すことになるという差はあるものの、いずれも量を表す点は同じである^{注5}。

「(7)係の者までお尋ねください」は、空間の範囲を表す点では「(6)学校まで歩く」と同じである。しかし、(6)の範囲は移動動作を継続する範囲であるが、(7)の範囲は情報移動の始発点と到達点によるもので、「尋ねる」という動作を継続する範囲ではない。従って、(7)は(6)のような動作の量は表し得ない。(7)の表す意味は二と比較すると分かりやすい。「だれに／??まで尋ねたらいいですか」と、不定語と結びつく場合、マデは不自然である。到達点がどこかを定めない不定語となじまないことから、このマデは、“尋ねる先は受付などではなく係の者である”と、到達点を他と区別して示していると考えられる。やや自然さに欠けるが、「係の者まで(は)尋ねない」と否定にした場合に“受付には尋ねても係の者には尋ねない”といった意になるのも、このマデが複数の選択肢から到達点を選ぶことを表すためであろう。こうした複数の選択肢の中から該当する項目を取り上げる意味を、ダケのように積極的に他の項目を排除する“限定”と区別して、“指定”と呼ぶと、(7)は範列関係を表し、項目を“指定”すると言える(藪崎2009)。

「(8)5時まで提出する」は「(5)5時まで遊ぶ」と同様に時間の範囲を表す。しかし、(5)は「遊ぶ」という終了限界を有さない動作が「5時」に終了することを表すものの、(8)は「提出する」が内在する終了限界達成と同時に動作が終了することを表し、「5時」に終了することを含意しない。それは、(5)のマデは述語の表す動作に終了限界を付与するのに対し、(8)のマデは終了限界を付与するものではないからである。(8)のマデは動作が最終的に実現する時点を想定して示すものであり、動作の量を表し、指し示す点が動作の終了時となる(5)とは区別される^{#6}。

ここまで見たように、「非評価用法」のマデが述語と結びついて表す意味には大きく分けて3種ある。2節で見た「取り立て用法」「程度用法」の定義に照らすと、(4)(7)は範列関係を表すことから「非評価用法」かつ「取り立て用法」である。(5)(6)は述語を副詞的に修飾する点で「程度用法」の(2)(3)と共通する。もちろん、(5)(6)は量を表し、(2)(3)は程度を表すという差はある。しかし、量とは「状態の程度」という面もあり(工藤1983)、連続的であることから、(5)(6)は「非評価用法」かつ「程度用法」である。また、(8)は述語の表す事態が最終的に実現する時点を想定し、限度として示すものであり、範列関係や動作の量を表す「取り立て用法」「程度用法」とは異なる。以下、これを「限度用法」と呼ぶと、(8)は「非評価用法」かつ「限度用法」である。

(4)～(8)のマデを「非評価用法」として括る表1のような分類は、これらが評価に関知しない点で共通することは示せても、述語と結びついて表す意味に差があることは示し得ない。また、先の(9)～(12)のような固定した形の用法も含めて、マデの諸用法の関係は示されるべきであり、新たな分類が必要である。

4. マデの諸用法の分類

結論を先取りする形になるが、3節で述べたことを踏まえた分類が表2である。これは、左端に示した、範列関係と動作・状態の程度量、そして限度のいずれを表すかという、マデの示す項目が述語と結びついて表す意味による分類と、最上段に示した、意外性・難易度というマデの示す項目に対する評価による分類を、二次元的に組み合わせたものである。なお、この表にはここまであげた例の他、以下の議論で出てくるものも併せてあげてある。以下、「非評価用法」「高度評価用法」「低度評価用法」の順に見ていく。

【表2】マデの諸用法の分類^{注7}

項目に対する評価 述語との 結合による意		非評価用法	高度評価用法	低度評価用法
		中立	意外・困難	当然・容易
取り立て用法	範列関係	(4)10番まで宿題にした (7)係の者までお尋ねください	(1)太郎まで来た (1'a)(1'b)太郎まで来なかった (9)病院へ行かないまでも風邪薬はのむ (10)風邪ぐらい病院へ行く <u>ま</u> でもない (13)借金 <u>ま</u> までしてブランド品を買った	(11)実体験を書いた <u>ま</u> <u>で</u> だ
程度用法	述語の表す動作・状態の程度量	(3)歩ける <u>ま</u> でに回復した (5)5時 <u>ま</u> で遊ぶ (6)学校 <u>ま</u> で歩く	(2)異常な <u>ま</u> でに執着した	(12)私が知っているのは <u>そ</u> こ <u>ま</u> でだ
限度用法	到達が想定される限度	(8)5時 <u>ま</u> でに提出する	X	X

4.1 「非評価用法」

「非評価用法」は、2節で述べたように、意外性・難易度という評価に関知せず、始発点を示すカラと対応可能な範囲を表すものを指す。

「(4)10番まで宿題にした」「(7)係の者までお尋ねください」は、それぞれ“宿題にした問題”“尋ねる相手”という意味で同類の項目を想起させる、範列関係を表す「取り立て用法」である。

「(8)5時までに提出する」は「提出する」という動作が最終的に実現する時点を想定して示す「限度用法」である。なお、「限度用法」は、指し示す項目に対

する評価を表すことはない。それは、当該用法が量を表さないためであると推測する。工藤(1983)に、程度副詞とその周辺の中には「(数)量性の濃いものから、(中略)評価性の濃いものまでである」ことが論じられている。「取り立て用法」「程度用法」には、量、あるいは程度を表す用法があるのに対し、「限度用法」にはそれが無い。そのことが、評価に関わる用法への広がりがないことと関連しているとみられる。

「(5)5時まで遊ぶ」「(6)学校まで歩く」は、それぞれ「遊ぶ」「歩く」という動作の量を表す「程度用法」である。(5)(6)の他、(3)も「非評価用法」かつ「程度用法」に含まれる。従来、(3)は(2)と一括りにされ、差異が詳述されていないが、両者は区別する必要がある。

(2) 異常なまでに執着した。

(3) 歩けるまでに回復した。

(3)は「回復した」程度を、変化の結果実際に到達した「歩ける」という状態によって表すのに対し、(2)は「執着した」程度を「異常だ」という話し手の評価によって表す。こうしたマデに前接する語の差により、(3)は単に到達した程度を表すに過ぎない—「立てるまでに回復した」「走れるまでに回復した」など、程度が低いことも高いことも表し得る—のに対し、(2)は常に程度が高いことを表す。また、(3)は述語の表す漸次的な変化を捉えて程度を表すが故に「寝たきりだったところから歩けるまでに回復した」と、始発点を示して状態変化の範囲を表し得るのに対し、(2)は述語の表す静的な状態に対する評価によって程度を表すが故に、始発点を示し得ない。従って、(3)は「非評価用法」、(2)は「高度評価用法」と区別される²⁸⁾。

4.2 「高度評価用法」

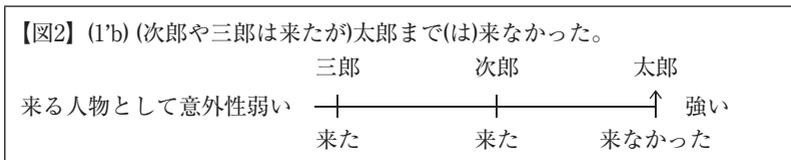
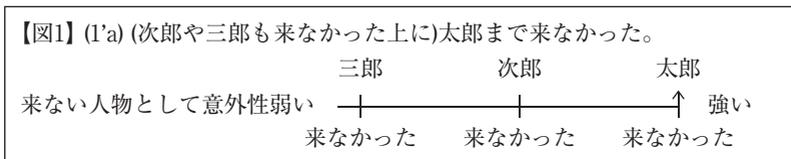
「高度評価用法」は、マデの示す項目に対し、意外性が強い、難易度が高いという評価を表す。「程度用法」は、4.1に見た「(2)異常なまでに執着した」のように、高い評価を表す語を示すことにより、述語の表す状態の程度が高いことを表す。一方、「取り立て用法」は、意外性・難易度によって序列づけた範列項目のうち、最も意外性が強く、実現困難な項目を示す。従来、「取り立て用法」のマデとされ、議論の対象にされるのは「(1)太郎まで来た」のような“意外・累加”を表すものがほとんどである。しかし、「高度評価用法」かつ「取り立て用法」のマデは、“意外・累加”を表すものに限られない。以下、このことを示すべく、否定辞を伴う場合、手段を表す場合を見る。

4.2.1 否定辞を伴うマデ

「取り立て用法」のマデが否定文に生起する場合、2つのタイプがあることが指摘されている(茂木1999、沼田2009など)。

(1'a) (次郎や三郎も来なかった上に)太郎まで来なかった。

(1'b) (次郎や三郎は来たが)太郎まで(は)来なかった。

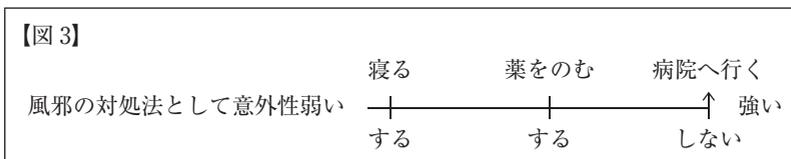


(1'a)は“次郎達が来ない上に太郎も来ない”ことを表し、「太郎」は「…三郎、次郎」に“累加”されるのに対し、(1'b)は“次郎達は来たのに太郎は来なかった”ことを表し、「太郎」は「来なかった」に該当する項目として“指定”されている^{註9}。また、(1'a)の「太郎」は「来ない」人物として意外性が強く、来るだろうという見込みに反して「来なかった」ことを表すため、“意外”という意味に解釈されるのに対し、(1'b)の「太郎」は「来る」人物として意外性が強く、来ないだろうと見込んだ通りに「来なかった」ことを表すため、“当然”という意味に解釈される。(1'b)は意外性・難易度によって序列づけた項目のうち、最も意外性が強く、実現困難であると評価する項目をマデで示す機能は(1)(1'a)と同じであるものの、“意外・累加”という意味には解釈されない。

固定した形で用いられる(9)(10)も、最も意外性が強く、実現困難な項目を示し、それを否定の対象として“指定”する点で、(1'b)と同類である。

(9) 病院へ行かないまでも風邪薬はのむ。

(10) 風邪ぐらい病院へ行くまでもない。



(9)(10)は風邪の対処法として「寝る、薬をのむ」などの範列項目が想起される中、最も労力がかかって実現困難な「病院へ行く」をマデで示す。そして、(9)は「病院へ行く」ことの実現を否定し、薬の服用といった容易なことが実現することを表す。(10)も最も実現困難な「病院へ行く」ことの実現を否定し、寝たり

薬をのんだりすれば十分であることを表す(藪崎2011)。つまり、(9)(10)は慣用的ではあるが、意外性・難易度によって項目を序列づけ、最も意外性が強く、実現困難であると評価する項目をマデで示す点で、他の「高度評価用法」かつ「取り立て用法」と同じである。なお、議論が煩瑣になるのを避けるべく、ここでは詳述しないが、範列項目のうち最も意外性が強く実現困難な項目を示すマデが疑問文、禁止を表す文に生起する場合も、疑問、あるいは禁止の対象はマデの示す項目であると“指定”する点で、(1'b)(9)(10)と同じである。

4.2.2 手段を表す際に用いられるマデ

手段を表す際に用いられるマデとは、次のような例を指す。

(13) 借金までしてブランド品を買った。

(13)は、「ブランド品を買う」手段に色々ある中で、最も意外で実現困難な「借金」という手段をとったことを表す。このとき、「ブランド品を買うためにこつこつ貯金をし、アルバイトをして稼いだ上に、借金もした」という“累加”の意にとれる一方、「複数の手段がある中で借金を選択した」という“指定”にもとれる。このように、手段を表す際に用いられるマデが“指定”を表す場合もあることは、次の例からも裏づけられる。

(14) 一人暮らしの時代、急に泊りにきた同性の知人から「あなたの歯ブラシ、使わせて」と頼まれた。買い置きの新品を渡したが、他人のを使得まで磨こうとするという心理が不思議だった。

(朝日新聞2014年5月3日を一部改変)

歯ブラシを携帯せず外泊した先で歯を磨く手段には、「歯ブラシを買いに行く、新品の歯ブラシを譲ってもらう」などがある。(14)は「歯ブラシを買いに行き、譲ってもらった上に、他人のものも借りる」という“累加”の意にはとれず、最も意外な「他人の歯ブラシを借りる」という手段を選択する“指定”を表している。管見の限り、平叙の肯定文において、見込みに反する事態の実現に対する“意外”という解釈が成り立つマデで“指定”を表すのは、(13)(14)のような手段を表す場合に限られる。なぜ手段を表す場合に“指定”を表し得るのかは今後の課題であるが、この問題を措いても、「取り立て用法」のマデが押し並べて“意外・累加”の意に解釈されるわけではないことが分かる。

4.2.3 「取り立て用法」のマデ

従来の「取り立て用法」のマデの記述には、これが押し並べて“意外・累加”を表すようにとれるものがある(野田1995: 30、近藤2003: 65など)。確かに、ここで見た「取り立て用法」かつ「高度評価用法」に属すマデは、意外性・難易度によって序列づけられた範列項目のうち、最も実現が困難で、意外な項目を示すという機能を有する点で共通する。ただし、“実現は意外・困難であろう”という

評価に反して当該事態が実現し、結果として“意外”の意に解釈されることもあれば、否定文に生起し、“実現は意外・困難であろう”という評価の通りに当該事態が実現せず、結果として“当然”という意に解釈されることもある。また、“意外”と“当然”のいずれの意に解釈されるかに拘らず、“累加”を表すことも“指定”を表すこともある。さらに、「取り立て用法」のマデには、4.1で見た「非評価用法」に属して評価に関知しないもの、次に見る「低度評価用法」に属して“意外・累加”とは対蹠的な評価を項目に与えるものもある。

4.3 「低度評価用法」

「低度評価用法」は、「高度評価用法」と同じく、意外性・難易度という評価に関わるが、マデの示す項目に対する評価は対蹠的である。

(11) 実体験を書いたまでだ。

(12) 私が知っているのはそこまでだ。

(11)は、「実体験を書いた」を示すのみで、同類の「架空の話を書く、調査結果を書く」といった項目を想起させる「取り立て用法」である。これは範列関係にある項目のうち、創造や調査をして書くという手間のかかる難しいことではなく、労を要さず容易な「実体験を書く」ことが実現したに過ぎないと“限定”し、“たいしたことはしていない”という意味を表す(藪崎2012a)。(12)については丹羽(1992: 114)が「低程度」を表すと論じているように、“たいしたことは知らない”と、「知っている」程度が低いことを表す「程度用法」である。これが「低程度」を表すことは、

(12') 私はそこまで知っている。

と比べると分かる。(12')は「知っている」程度量を客観的に表すに過ぎず、それを大きいと捉えるか、小さいと捉えるかという評価には関知しないのに対し、(12)は“知っている程度は低く、それ以上のことは知らない”という意味を表している。(11)は範列関係を表し、(12)は程度を表す点で、「取り立て用法」と「程度用法」に区別されるものの、指し示す項目に対し、意外性が弱く、実現が容易であるという評価を表す点で共通する。「低度評価用法」は常に「マデだ」という形で用いられるが、文末で用いられることがなぜ「低度評価」を表すことにつながるのかは、今後の課題である。

4.4 従来の分類との差異

マデを「取り立て用法」「程度用法」「非評価用法」の3種に分ける表1のような分類は、範列関係を表すのか、述語を副詞的に修飾するのかという観点と、意外性・難易度という評価に関わるか否かという観点の、異なる2つの基準による分類を並列させたものと捉えられる。しかし、評価に関わるか否か、「取り立て用法」なのか「程度用法」なのか、という観点を二次元的に組み合わせることに

よって、従来格助詞とされるに留まっていた用法の意味を詳細に示すこと、そして慣用的とされる用法も含めたマデの諸用法の相関関係を統一的に把握することができる。また、「取り立て用法」が広いという点でも、本稿の分類は従来のそれと差がある。

2節で述べたように、範列関係を表すものを括るのが「取り立て用法」であるが、マデの「取り立て用法」はスケールの性質、スケール上の何を示すのかによって多岐にわたっている。「非評価用法」のうち、「(4)10番まで宿題にした」は数という客観的基準による序列によって範列項目がスケールを形成するのに対し、「(7)係の者までお尋ねください」の範列項目はスケール形成に関わらず、「尋ねる人物から係の者へ」という空間のスケールを表す点で異なる。しかし、こうしたスケールの性質により(4)(7)ともに特定の評価に関知しない点で共通している。一方、「高度評価用法」と「低度評価用法」は、意外性・難易度による序列によって範列項目がスケールを形成するところは同じだが、前者は意外性が強く難易度の高い項目を、後者は意外性が弱く難易度の低い項目をそれぞれ示すために、意味に差が生じる。

「取り立て用法」のマデを従来よりも広く捉える意義は、「程度用法」「限度用法」に属す諸用法との関係が示せるという点だけでなく、「取り立て用法」内部における用法間の連続が捉えやすいという点にもある。たとえば、「小さな本屋に豆字引からオックスフォードまでである」など、本稿が「取り立て用法」かつ「非評価用法」とするマデと、「(1)太郎まで来た」のような“意外・累加”を表すマデは連続的であるとの指摘がある(井島2007、沼田2009)。その理由は、辞書のサイズの大小という客観的基準によって序列づけられた項目によるスケールが、小さな本屋にある辞書として意外性の弱い項目から強い項目へという序列づけによるスケールともとれるためであることと、範列関係を表し、項目を序列づける性質を有することから説明される—ただし、「非評価用法」は「小さな本屋にオックスフォードから豆字引までである」のようにスケールを反転し得るのに対し、(1)など「高度評価用法」のマデはそれができない点で区別される—^{注10}。また、「取り立て用法」のマデを“意外・累加”を表すものとし、狭く捉えると、「(1'b)太郎まで(は)来なかった」のような否定辞を伴うマデ、「(13)借金までしてブランド品を買った」のような手段を表す際に用いられるマデはそこから洩れてしまうが、本稿の分類であればこれらを同類のものとして括ることが可能である。

5. マデの意味

表2に見たように、マデの用法は多岐にわたるが、では、マデの諸用法を貫く意味は何であろうか。マデは項目や量の累積を表すと見られることもあるが、マデの諸用法を貫く意味は到達点を示すことに尽きると本稿は考える。「取り立て

用法」のマデに“指定”を表すものがあること(用例1'b、9、10、14)、また“限定”を表すものもあること(用例11)を述べたが、累積を表さないのは「取り立て用法」に限られることではない。「(2)異常なまでに執着した」「(3)歩けるまでに回復した」はいずれも述語の表す状態の程度を修飾する「程度用法」である。しかし、(3)は“起き上げるまでに回復して、立てるまでになり、歩けるまでに回復した”という、漸次的な程度の高まりを表すのに対し、(2)は“少し執着して、とても執着して、異常なまでに執着した”とは言えず、「執着する」が内在する程度のスケール上の1点を示すに過ぎない。(2)のように累積を表さない点では「限度用法」の「(8)5時までに提出する」も同じである。これが表す期限には、たとえば「月曜日の8時から金曜日の5時まで」といった幅はある。しかし、「提出する」の実現は1回でもよく、「月曜日の8時にも、9時にも…金曜日の5時にも提出する」という複数動作の累積を含意するものではなく、また「月曜日の8時から金曜日の5時まで提出し続ける」という動作の継続量を表すものでもない。単に動作が実現する最終時点を想定し、それを時間軸上に示すに過ぎない。このように、項目や動作の累積を表さない「程度用法」「限度用法」もあり、マデの諸用法に共通するのは到達点を示すことのみである^{注11}。

マデの示す到達点は時間や空間、程度など、連続的なスケール上の到達点であることもあれば、モノやコトなど個別に分離可能な項目が形成するスケール上の到達点であることもある。後者には、数など客観的な基準によって序列づけられた項目がスケールを形成する場合もあれば、意外性・難易度という評価によって序列づけられた項目がスケールを形成する場合もある。客観的なスケールにおける最終到達点を示す場合は評価には関知せず、意外性・難易度によるスケールにおける最終到達点を示す場合は評価を伴う。後者には当然・容易と評価されるモノ・コトを示す場合と、それとは逆に意外・困難と評価されるモノ・コトを示す場合があることから、用法は多岐にわたる。

種々のスケールにおいてどこに到達したのかを示すのがマデの役割であり、その範囲を包括して累積的な意味を表すか否か、またその到達点への到達が実現するのか、想定に留まる限度にすぎないのか、というところは、マデの二次的な意味である。

【注】

- 1 「非評価用法」には、評価を表していると読める場合もある。「東京から大阪まで歩いた」は、始発点から到達点へ至る範囲が大きいので、「歩いた」量が大きく驚きだといった評価を読み込むことがある。また、「寝室から庭先まで歩いた」は、そのままでは何ら評価を表していないととれるものの、「長らく寝たきりだった人が寝室から庭先まで歩いた」「休みの日は何もしない。寝室から庭先まで歩いたに過ぎない」など、文脈によって驚き、あるいはいたしたことはないといった評価を読み込むこともある。ただし、こうした評価は範囲の大小や文脈による副次的なものに過ぎない。当該用法は、マデの示す項目に対する評価は中立で、副次的に伴う

- 評価も「大～中立～小」と幅がある。これは、4節で詳述する「高度評価用法」「低度評価用法」がマデの示す項目に対し一定の評価を表すのとは異なることから、「非評価」とする。
- 2 「非評価用法」と他の用法の関係については寺村(1991)、沼田(2009)などにも論じられているが、これらは用法間の関係を問うことを中心課題とするものではない。「取り立て用法」と「程度用法」の関係について論じたものもあるが(森重1954、丹羽1992など)、多くは「取り立て用法」を主に論じている。なお、中古語のマデについては小柳(1999)が「非評価用法」も含めて諸用法の関係を論じている。
 - 3 「取り立て用法」の捉え方の差は、数を表す語と結びつくモヤクライなどの扱い方に顕著に現れる。数量が予想より多いことを表す「①百人も来た」、概数を表す「②百人ぐらい来た」について、仁田(1997)はいずれも「取り立て助辞の基本的な意味・用法からずれるもの」とする。益岡・田窪(1992)も①②を同種のものとして扱っている点は仁田(1997)と同じである一ただし、これらを「取り立て助詞の主な用法」とは別の「取り立て助詞と数の表現」としており、「取り立て用法」と見ているのか否かは判然としない。一方、寺村(1991)は①は「取り立て助詞」、②は「接尾語」(p.120)とし、日本語記述文法研究会(2009)も、①は「とりたて助詞」であるが、②は「とりたて助詞ではなく接尾辞である」(p.171)と述べ、両者を区別する。①②の扱いについて、本稿は①②を同種とする仁田(1997)と同様の立場に立つ。「取り立て用法」の定義の差をめぐる問題について、詳しくは別稿で論じる。
 - 4 ただし、(4)の「10番、9番…」という項目の同類性は、これらが数であるという一般常識によっても保証されているのに対し、(1)の「太郎、次郎…」が同類であることは述語との結びつきによって初めて保証されるという点で差はある。しかし、(4)と同種のものには、「オックスフォードから豆字引までである」「生鮮食品から日用品まで揃っている」など、マデに前接する語の意によってのみ項目の同類性が保証されているわけではない例もあり、(1)のタイプと(4)のタイプは連続的である。
 - 5 (6)のような移動性述語と結びつくマデに関する捉え方に差はあるものの、(5)のような時間の範囲を表すマデが量を表すとの見方は小柳(1999)にもある。なお、当該用法は範囲と述語の性質によって(4)のタイプと連続する。時間や空間といった連続的な範囲を表し、述語が継続的な動作を表す(5)(6)と、個別に分離可能な項目による非連続的な範囲を表し、述語が継続的な動作を表さない(4)は区別される。しかし、「1頁から50頁まで読んだ」のように、非連続的な範囲を表し、述語が継続的な動作を表す場合は、これが「読む」という動作の継続量を表すととれば(5)(6)と同類であるが、「1頁も2頁も…50頁も読んだ」という項目の累加を表すととれば(4)と同類である。範囲の性質と用法との関係に対する考え方は、丹羽(2001)によるところが大きい。
 - 6 (5)と(8)は、述語、あるいは述語と文中の成分との組み合わせが表す動作・状態に終了限界を有しているか否か、またそれに応じてマデが終了限界を付与するか否かという点で差があり、単に二の有無のみによる差ではない(藪崎2012b)。なお、(8)と同類のものには「③仕事に応じて千円まで支給する」などがある。③は「支給する」金額の上限を示すに留まり、動作を限界づけてはいない。また、千円を支給するか否かに関知せず、(8)が5時に提出するか否かに関知しないのと同じである。当該用法については、(8)のような「期限」を表す際には二が付くことが多いのに対し、③に二が付かないのはなぜか、また他の助詞に同様の用法があるのかなど、残された課題は多い。
 - 7 この二次元的な分類は、他の副助詞の意味記述にも有用だと見通される。たとえば、モの「取り立て用法」には「非評価用法(彼も同じクラスです)」、「高度評価用法(親友にも裏切られた)」はあるが、「低度評価用法」はない、といったことが示せる。従来のマデの記述には、時間の(5)と空間の(6)を分けたり、程度を表す(2)と(3)を一括りにしたりするものがある。しかし、「10分だけ走った」「2kmだけ走った」「走れるだけ走った」が程度量を表すものとして従来括ら

- れることに鑑みれば、(3)(5)(6)を括るのもそれと同じことである。また、同じく程度を表す「驚くほど成長した(高度評価)」と「昔ほど食べられない(非評価)」を、「程度用法」の下位レベルで分けることと、(2)(3)を分けることは並行的に捉えられる。本稿の分類が、単にマデの記述のためだけでなく、他の副助詞とマデを並行的に記述する上でも有意であることを今後示したい。
- 8 (2)の「執着する」にも「少し～とても～異常だ」といった範囲はある。しかし、これは「執着する」という語が内在する程度の幅である点で、(3)のそれと区別される。(2)と(3)の別は述語の性質によるところもあるが、それだけではない。「けばけばしいまでにきらびやかだ」など、状態性述語の場合は全て(2)と同類である。しかし、動詞述語の場合は動的变化の側面を捉えるのか、変化後の静的状態を捉えるのかによって異なる。(3)は「回復した」の動的变化を捉え、その変化結果の到達点を表すものだが、「異常なまでに回復した」は変化後の状態を捉え、その状態に対する評価を表すことから(2)と同類である。(2)のマデについては藪崎(2010)を参照されたい。なお、主張に異なるところはあるものの、小柳(2007: 122)の「マデは、取り出した要素を最上位として示す極的な意味を有するので〈極度〉を表し、極端さは意外さ・驚嘆などの情意を誘発しやすいために、それが評価となって現れる」との議論については、(2)を「高度評価用法」に位置づける本稿と同趣のものとして理解される。
- 9 (1'b)のタイプについて、井島(2007: 75)は「現実世界」「期待世界」という概念を用いて「並列」(本稿の“累加”と同義)を表すと説明している。井島の主張は、(1'a)は「次郎達はともかく太郎は来るだろう」という「期待世界」と、「次郎達も太郎も来なかった」という「現実世界」のうち、「現実世界」において“累加”を表すのに対し、(1'b)は「次郎達だけでなく太郎も来るだろう」という「期待世界」と、「次郎達は来たが太郎は来なかった」という「現実世界」のうち、「期待世界」で“累加”を表す、という趣旨のものとして理解される。しかし、(1'a)は“皆来なかった”ことを、(1'b)は“太郎のみ来なかった”ことを表すと捉えるのが普通であり、「現実世界」と「期待世界」という異なる次元で表す意味を同じく“累加”として括る必要があるのか疑問である。また、井島においてマデが「期待世界」で働き得るとの見方は、疑問文、推量を表す文に生起できることを根拠にしていると読めるが、「現実世界」でしか働かないとされるサエが推量を表す文に生起する例も見られ(僕はあの門番をさえきつと懐しむことだろう。(世界の終わりとハードボイルド・ワンダーランド))、「期待世界」が何を指すのかという点でも疑問がある。後述するが、(1)(1'a)(1'b)のマデの共通点は、“意外・累加”を表すことではなく、意外性・難易度によって序列づけられた項目のうち、最も意外で実現困難であると評価する項目を示す点にあると本稿は考える。
- 10 「非評価用法」と「高度評価用法」の連続は「程度用法」にも見られる。「④北海道から鹿児島まで走破した」「⑤寝たきりの人が走れるまでに回復した」は累積する程度量を表すために、始発点から到達点に至る範囲が大きいと、結果として量が多い、程度が高いという評価を読み込みやすい。また、⑤においては範囲の大きさに加えて、文脈もそうした評価を読み込みやすくし、「高度評価用法」に近似しているとれる。ただし、4.1で述べたように「高度評価用法」は静的状態の程度が高いことを、高い評価を表す語を示して表すものであり、④⑤において範囲が大きかったり、文脈が支えとなったりして、結果として程度量大きいと読み得ることは区別される。
- 11 累積を表すか否かという観点からもマデの諸用法を分類できるが、本稿はこれを二次元的分類の基準としてはとらない。それは、(13)のような手段を表す際に用いる「高度評価用法」かつ「取り立て用法」のマデには“累加”と“指定”のいずれも表す場合があり、累積を表すか否かで峻別できなかつたり、従来「取り立て用法」として括られていたものの共通点が見えにくくなつたりするからである。また、他の副助詞を記述する際に、「子供でも分かる」は累積

を、「お茶でもいかがですか」は非累積を表す、というように、累積を表すか否かが用法分類の基準として有用な助詞もあるものの、ダケのように累積を表すか否かが分類基準として機能しない助詞もある。他の副助詞に汎用できる記述方法をとるという点でも、累積を表すか否かは、表2に示した2つの基準よりも下位の分類基準であると考えられる。

【引用文献】

- 井島正博(2007)「サエ・マデ・デモ・ダッテの機能と構造」『日本語学論集』3、東京大学。
 金水敏(2000)「時の表現」『日本語の文法2 時・否定と取り立て』岩波書店。
 工藤浩(1983)「程度副詞をめぐる」『副用語の研究』明治書院
 工藤真由美(1995)『アスペクト・テンス体系とテキスト—現代日本語の時間の表現—』ひつじ書房。
 小柳智一(1999)「中古のマデ—第一種副助詞—」『国語学』199。
 小柳智一(2007)「第1種副助詞と程度修飾句—程度用法の構文とその形成—」『日本語の構造変化と文法化』ひつじ書房。
 近藤泰弘(2003)「名詞の格と副—格助詞と副助詞の性質」『朝倉日本語講座5 文法I』朝倉書店。
 寺村秀夫(1991)『日本語のシンタクスと意味Ⅲ』くろしお出版。
 仁田義雄(1997)「日本語文法研究序説—日本語の記述文法を目指して—」くろしお出版。
 丹羽哲也(1992)「副助詞における程度と取り立て」『人文研究』44-13、大阪市立大学。
 丹羽哲也(2001)「「取り立て」の範囲」『国文学解釈と教材の研究』46-2。
 沼田善子(2009)「現代日本語とりたて詞の研究」ひつじ書房。
 日本語記述文法研究会(2009)「とりたて」『現代日本語文法5』くろしお出版。
 野田尚史(1995)「文の階層構造からみた主題ととりたて」『日本語の主題と取り立て』くろしお出版。
 益岡隆志・田窪行則(1992)『基礎日本語文法—改訂版—』くろしお出版。
 茂木俊伸(1999)「とりたて詞「まで」「さえ」について—否定との関わりから—」『日本語と日本文学』28、筑波大学。
 森重敏(1954)「群数および程度量としての副助詞」『国語国文』23-2、京都大学。
 藪崎淳子(2009)「「格助詞マデ」の副助詞性について」『日本語文法』9-2。
 藪崎淳子(2010)「「高程度」のマデ」『文学史研究』50、大阪市立大学。
 藪崎淳子(2011)「否定辞を伴うマデモ」『文学史研究』51、大阪市立大学。
 藪崎淳子(2012a)「「ダケだ」と「マデだ」」『日本語文法』12-1。
 藪崎淳子(2012b)「期間を表すマデと期限を表すマデ」『人文研究』63、大阪市立大学。

付記

本稿は、日本語文法学会第11回大会(2010年 於 就実大学)での口頭発表に加筆・修正したものです。発表からこの稿を成すに至るまでには多くの方に有益なご意見を賜りました。本稿執筆に際しては、丹羽哲也先生、小柳智一先生、尾山慎氏に有意義なご指摘を数多く頂きました。記して感謝申し上げます。